

現在の自由党吉田内閣ほど、日本の全インテリゲンチヤからきらわれた政府は、近代の日本ではあまり類がなかつたといえよう。そのきらわれかたの徹底さかげんと、範囲の広さは、ある意味で戦争中の東条内閣や、さらにさかのぼつては、田中義一反動内閣などのきらわれかたよりもひどい。東条内閣や田中内閣の存在していたころは、それらの背後に、軍閥や天皇制などを中心にした絶対主義的な勢力が厳然として存在していた。ところが、現在の吉田内閣の背後には、そのようなものは存在していない。もちろん暗然の支配力としてのアメリカ権力は存在しているが、それはどう見つもつてみても、戦争中や戦前の、東条内閣や田中内閣の背後に存在していた絶対力に比較すればごくよわいものだし、かつ間接的なものである。このことを計算のなかに入れると、現在、吉田内閣の日本全インテリからのきらわれかたは、驚くべき現象だといえるであろう。しかしながら、さらに驚くべき現象は、このようにきらわれながら吉田内閣がこれほど長いこと存続しているということであり、さらにまた、全インテリがこぞつてこのようにきらつてい

内閣を、うち倒しえないでいるという現象であろう。

これは、日本というもの、日本人というもの、そして日本のインテリゲンチヤというものについてある程度まで知つてゐるわれわれにとつては、ただ、驚くべき現象として眺めておられることがらであるが、ヨーロッパ的合理主義、ことにアメリカ的合理主義になれてゐるヨーロッパ人や、アメリカ人にとつては、ほとんど不可解な、異様な、そして最後に、軽蔑にあたひするナンセンスとして眺められてゐるのではないかと思う。事実、かなり多くのアメリカ人が、この現象をまつたくナンセンスなものとして無視してゐる証拠がかなりある。

アメリカ人などが、そのように思うのも当然だと私には思える。なぜならばアメリカ人はつぎのように思うらしい。現在の日本は、民主主義的な憲法をもち、そしてある程度まで国民全体の自由な意志が、国の政治のうえでも生かされるような、体制をもつた国である。だから、国民全体の過半数が、吉田政府の政治に不満ならば、国民は選挙によつて吉田内閣をうちたおすことができる。そして、その国のインテリゲンチヤは、その国の国民大衆を代弁したり指導したりする。つまり、国民大衆の中からしげんに生まれ出てきた選手たちである。それらの選手たちの中の、これほど多数、ほとんど全部に近いものたちが吉田政府をきらつてゐるということは、すなわち、国民の大部分が吉田政府をきらつてゐる証拠とみてもよい。

また逆に、これほど多数のインテリガ、これほど強く、これほど一致して吉田政府をきらつてゐるならば、これらのインテリたちはしげんに国民大衆にむかつて吉田政府の悪政であるゆゑんを説明し説得して、つぎの選挙に国民大衆の大部分をして、自由党の候補者に投票させないようにしむけ、それによつて、吉田内閣が倒れるようにさせるはずであるし、またそうできるはずで

ある。

つまり、アメリカ人にとつては、これほど多数の日本のインテリゲンチヤが、實際上これほど徹底的に国民大衆を指導しえない状態、これほど完全に国民大衆への影響力をもつていない状態、一言に言えば、これほど多数のインテリが、国民大衆からこれほど完全に浮きあがつている状態なるものが、どうしても理解できないらしいのである。したがつて、彼らは現在の日本の雑誌や新聞をうずめている反吉田政府的な言論は、その質において激烈、その量において多数のように見えても、実際においてはほんのひと握みの左翼的な大学教授や、ルンペンふうの共産党同調者などの、ただやかましいだけのプロパガンダであるにすぎないと見るにいたつたらしい。

このような見方が、当をえたものであるかどうかをここでは問わないが、すくなくともその実際的結果からみれば、そう思われても仕方のない点がある。

つまり日本のインテリゲンチヤの大部分が、その実績のうえから、ただ、口さきや筆さきだけの方に達者な腰ぬけに近いものたちであるということを否定することができなくなりつつある。

2

インテリゲンチヤが腰ぬけになりやすいということは、なにも現代にかぎつたことではなく、また日本にかぎつたことでもなくて、それは昔から今にいたるまで、世界のどこでもある程度までそのとおりであるかもしれない。それは、個々のインテリゲンチヤ自身の性質からくるよりも、インテリゼンスというものの自体にそのような性質がふくまれているのかもしれない。つまり

インテリゼンスというものは、最初は人間生活の実際から生まれたものであるにもかかわらず、それが生まれてしまつたあとでは、それ自身の経路をたどつて成長していくものであり、その成長の結果は、人間生活の実際から引きはなされたり矛盾したりすることが往々にして起きるものらしい。現在の段階における原子物理学のうんだ原爆や水爆などの、人類全体にたいする関係などもその、一二例であるともいえよう。

そういう考えかたからいえば、インテリゲンチャが腰ぬけになつてゐる現状は、当然の運命のひとつであるとも見られる。しかしながら、われわれは、自分たちがこのようにまで腰ぬけであるという状態にいつまでもたえることはできない。われわれは、完全に腰ぬけになつてしまふことに我慢はできない。よしんばそれが運命的なものであつたとしても、これにたいしてまつたく無抵抗ではいられないであろう。なぜならばわれわれは生みつけられ生かされて生きているものであると同時に、自分自身の意志をもつて生きているものであり生きていかなければならぬものだからである。

腰ぬけからのわずかずつでもの脱却、自己救拔ききゅうぼつをこころみないわけにはいかない。それはできるか？ できる。そしてそれはまず自分がなにゆえに腰ぬけになつたか、なりはじめたかについての無慈悲な自己反省を出発点としてできる。

さて、そこで私はインテリゲンチャの定義をここでのべようとは思わないし、その必要もないと思う。現に存在しているインテリゲンチャ、私もその一人であるインテリをあるがままに眺めながら話をしていただけだ。ただインテリのいちばん大きな特徴だけはいつておかなければならない。

私は思う。インテリゲンチヤとはそのいちばん大きな特色として、一般大衆とちがつて、いろいろな理由から、人道主義に立つて、自分一身の利害をある程度まで超克して、もつと広い集団や社会や民族や人類などの立場に立つて、ものを考えたりおこなつたりする意志と能力をもつた人間のことであろう。この特色については、たいがいの人に賛成してもらふことができるだろうと私は思う。

ところが、（人道主義に立つて、自分一身の利害を超克し、もつと広い社会や民族や人類の立場に立つ）ことが、実際においては、われわれの思つてゐるよりもひじように困難なことであるようで、それを実際においてやりとげるためには、ひじように強い性格が、ほとんど英雄的な性格が必要であるようだ。歴史のなかにも現代にもそのような人はいないことはないが、それらの人は一人ひとり、ほとんど人類の英雄といえるような人である。たとえば、アフリカのシュヴァイチェル、日本の田中正造たなかしょうぞうやそれから世界各国のすぐれた社会革命家たち、たとえば、レーニンなどもそれにあたるであろう。そのほかたしかに人類や社会や民族のために自我を完全に超克した人も多いが、しかしふつうのインテリは、さしあたりは実際においてそれほどすぐれていない。

一方において、人道主義というものが、ある持たれかたをすると、またある段階では、感傷的な英雄主義の要素を取り入れてしまうことや、それに転化してしまうことがあるらしい。そういうものが人道主義のなかに存在しているらしい。ふつうのインテリがこれに取りつかれると、いつのまにか人道主義そのものの優れた本質に自ら誇つて、自己についての過重評価におちいつたり、エリート意識や、さらに救世意識の傲慢さにおちいるばあひが多い。たいがいのインテリゲ

ンチャ、とくにラジカルなインテリゲンチヤの意識の内容をあるがままにしらべてみるがよい。そこには他の大部分の人びとよりも、自身の中に貴重なものが存在していると思つたり、また多くの人びとのなかから自分がとくにえらびだされて存在しているという意識や、それから、いまの世の中のまちがいや悪のいつさいを「自分が」直したり救つてやらなければならぬというような意識などを、もつていないものがほとんどいないことに気づくであろう。

もちろんこれらの意識それ自体としては悪いものとはいえない。しかしそれらのほとんどすべてが自分の実際の性格や能力を無視したところから発想されているという意味で、たいがいセンチメンタリズムであるにすぎない。なかには、主観的には最大多数の幸福のために自分一身の利害を超克して立つていていると思ひながら、じつは最大多数の幸福のために戦つてゐること自体がすなわち自分一身の卑俗な、または物質的な利益のためにしているという現実を忘れてしまつてゐるといふかたちや、二重にセンチメンタルなインテリさえもいる。終戦後にふえた「平和屋」などもその一例であろうか。

いや、他人^{ひと}さまのことをあげつらう必要はない。自分のことを語ろう。というのは、かつて私自身がそのようなセンチメンタルなインテリであつた。現在の私はかなりそうではなくなつたと思ふが、しかし現在とても、ある程度まではそのことからまぬがれえないでゐるかもしれない。

二十代から三十代へかけての私の社会主義思想、ふつうの意味のインテリが人道主義だけから出発して到達した思想だとはいえない。私は一個のインテリとして自分をかたちづくるまえに、すでに早く少年労働者として社会の現実のなかで押しもまれてきたのである。私の社会改革思想はじつはそのころから芽ばえてきたものである。しかしそのような客観的に準備された条件や、

自然発生的に植えつけられた考えが、ハッキリした社会・民族・人類などの考えに結びついて、思想と名づけうるような体系的なものに育ってきたのは、やはり自分がインテリとしての諸要素を自分のなかに蓄積して、人道主義的な立場に立つてからのできごとであつた。

いずれにしても、一人のラジカルなインテリとしての自分のこれらの出発点が、まちがつていたとは、いまでも思えない。しかしそのようにして歩を進めていくうちに、私の弱さは知らず知らずのうちに傲慢さを育てていった。そしてそのための自己過重評価やエリート意識や救世意識がふくれあがつてきたことに気がつかなかつた。私はほとんど自身を英雄のように、またはほとんど聖者のように、またほとんど神に近いぐらいの正しい判断をもちうる者として自分を感じながら行動することができた。つまりそのあいだ私は、多数のために自分一個の利害を忘れることができた。または忘れることができると思ふことができたのである。それほどまでに傲慢になることができたのである。

ただ、その期間はごく短かつた。冷たい現実が、まもなくこの私のセンチメンタルな夢をたたきさまして、私という人間の實際の弱さと小ささをイヤになるようなかたちで私に見せてくれるにいたつた。それは私という人間に、もともと権力意識がじつに完全に近いほど欠乏しているせいも多少はあるかもしれない。もう少し権力意識が私にあつたら、権力をつかみたいという現実的な意欲のために、私は私の夢をもう少し長く持ちこたえていることができたかもしれない。しかしそれができなかつた。私の夢はさめた。

夢がさめるのと同時に妙なことが私の中にはじまつた。それはその夢がさめたことは事実であつたが、しかし夢が純粹で深い夢であつただけに、その中で私をとらえていた尊いもの——つま

り人間全体のために自分のエゴイズムを超克するという思想は、私の意識全体を支配しつづけた。にもかかわらず一人の生活者としての自分の実際は、ほとんどつねにその思想をうらぎつたり、またはごく限られた範囲でしかその思想は、実践できなかつた。この矛盾と、ギャップのあいだに苦しむこと久しきにわたるにおよんで、私のうちには、はなはだしい分裂が生まれ、先の傲慢の裏側のものである劣等意識が生まれ、そして気がついてみたら実際行動のうえでは、完全に腰ぬけの不能者になりはてている自分がそこにいたのである。何をしても実際上に裏に力ある行為ができず、また一つのことを最後までやりとげる一貫性を失つてしまつている。そしてそのことの原因やきつかけの中で、いちばん大きなものは、つねに自分が真理だと思つているところのものを、自分は最後まで実践し得ないだろうという無力感であつた。これはじつにやりきれない地獄のようなものであつた。屈辱と自虐に満ちた時期であつた。この時期はずいぶん長くつづいたが、そのあいだの私は、完全に腰ぬけであつた。

3

しかし私はそのような自分の状態に、結局はたえきれなかつた。実際において、それほどまでに腰ぬけでかつ自分のことを、それほどまでに腰ぬけだと思いつづけては生きていけなくなつた。そこで、私が最初にしたことは、ほとんどむちやくちやに近い。それがよかろうと悪かろうと、赤裸の自我に立つてみるということであつた。そのためには、さしあたり一般的真理といわれているものの全部を無視した。出来るだけ純粋にエゴイズムだけのうえに立つて、そこからいつさい

を眺め、いつさいを排列しなおし、いつさいを取捨選択した。自分のエゴイズムと矛盾するような一般的真理の全部をすてさつたり、棚あげしてしまった。客観的価値というものの、いつさいをふみにじつてしまった。したがってまた、社会というものの認識の仕方にも変つてしまった。以前はそこに社会があり、その片隅にその一員としての自分が存在しているというふうには、つまり求心的な形で社会を認識していたが、そのころからそれをちょうど逆にして、まずここに自分がいて、をの周囲に家族がいて、それから友人、知己、隣人などがいて、それがしだいにひろがつて、集団になつたり、社会になりたり、国家になるというふうには、つまり遠心的に認識するようになつてきた。

このような考えかたが、正しいかどうかを私は知らなかつたし、いまでも知らない。ただ、私はそうせざるをえなかつたから、そうした。そしてそのころから私にとってはエゴイズムと矛盾しない形でのみ、社会の問題や一般の問題を考える習慣をもちはじめた。そして、そのころから私の腰ぬけ——不能は、しだいしだいになおつてきて、多少ずつは力ある実践をなしうるようになってきた。そして現在は私は腰ぬけではない。現在の私にとつての真理は、私のエゴイズムと矛盾しないものであり、そしてその真理のためならば、おる程度まで力ある行動をなしうるという段階にある。不能はいまだ完全に治癒されたとはいえないが、治癒へむかつての二三步はすでに踏みだされたような気がする。

私にとつての問題は、したがつて、この私のエゴイズムが、私の力で今後どこまで拡大しうるかということにかかつている。

言葉をかえていえば、現在の私にとつては、自我の世界のなかに、自分自身の問題として取り

こみえないような社会問題は、存在しないのにひとしい。だから問題は、その自我の関心と興味と愛を、私がどこまでひろく、遠くひろげうるかにかかっている。のぞみうるならば、それを世界のほうまでひろげたいものである。しかし現実には、私の自我のひろがりには、まだ、ごくかぎられたせまいものでしかない。私はこれを徐々にひろげる努力を忍耐づよくする以外に方法を知らない。

ただ私は自分の自我のひろがりのせまさや、おそさにいらだつて、ふたたび人道主義的なセンチメンタリズムにおちいることはしないであらう。

「人類の中に飢えたものがただ一人でもいるあいだは、私は幸福になりえない。」という言葉の美しさを私は感じる事ができる。しかしその美しさに酔つて、現在の瞬間に私が持ちうる、どのような幸福の一片もこれととりかえたくないし、とりかえないであらう。私にとつて消化することの不可能な黄金のべ棒をのみこむことによつて、私は自分の食欲のどんなわずかなものでも失う危険をおかさないであらう。ただ、もちろん人類の中の飢えたるただ一人の人間の問題を、私自身の自我の内側にまで自然にもちこみうるようなことになりうるまで、私の自我がひろがり、成長することをのぞみ、そのように努力するであらう。

以上、一個のインテリとしての私自身の腰ぬけになつた理由と、きつかけと、それからある程度まで治癒されてきた経過について語つた。私という一人の特殊な境遇と性格の人間に、ついでこのような記述が、他の多くのインテリにそのままの形であてはまるかどうかはわからない。また記述の仕方もこれだけでは、はなはだしく具体性を欠いていることも私は知つている。ただ、この程度のことでも、あるいは現代のインテリ一般の姿を理解する参考資料になるかもしれない。

し、また、ばあいによつては、当のインテリ自身のために、多少は「他山の石」ふうの材料にはなろうかと思つて書いた。話を自分のことにかぎつたのは、ただ単に他の人に迷惑をかけたくな
いという考慮のためである。日本現代のインテリゲンチヤの諸特性については、なお、いろいろ
の他の面から詳論する機会を近くもちたいと思う。

(一九五四年一月)

底本.. 「日本及び日本人——抵抗のよりどころは何か」 光文社

1954（昭和29）年4月25日初版発行

初出.. 「改造」

1954（昭和29）年2月号

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011（平成23）年6月5日